

愛媛果研ニュース

No.44 令和8年8月



令和8年の夏も過去2年と同様に危険な暑さが続いています。松山地方気象台の資料によると、松山の年平均気温は100年あたり1.9℃上昇しており、今後も平均気温の上昇、猛暑日数や1時間降水量50mm以上の発生回数の増加などが予測されています。近い将来には、本県においても酷暑日が珍しくなくなるのかもしれませんが、しかしながら、これらの気候変動は、果樹を生産する上では極めて重大な脅威となり、これまでの品種や栽培方法では、安定生産が困難になることが予想されます。そのため、果樹研究センターでは、かんきつの日焼け症や着色促進対策、キウイフルーツの立枯症対策、変化がみられる病害虫の発生消長の把握やそれを踏まえた防除などに加え、中・長期対策として、有効な台木の検討や耐性品種の開発などに取り組んでいます。また、本県オリジナル品種の栽培が増えているかんきつについては、栽培技術の確立はもとより、知的財産の保護にも一層注力し、愛媛かんきつのブランド力向上に努めたいと考えています。

さて、今回の果研ニュース No. 44 は、

- ① 愛媛型かんきつスマート農業産地モデル実証
- ② キウイフルーツ「ヘイワード」における耐水性台木「Bounty」の検討
- ③ カンキツ黒点病のマンネブ剤を用いない薬剤防除体系の検討、について取り上げました。

全国有数の温州みかん産地の八幡浜市真穴地区におけるスマート農業の取り組み、水田転換園など排水不良園地でのキウイフルーツの安定生産を目指した耐水性台木の検討、マンネブ剤の登録失効を踏まえたかんきつ黒点病の防除技術についてご紹介しますので、一読していただければ幸いです。

果樹研究センター長 近藤 俊夫